

て工夫されたものである。なぜならば、当時の世論の形成者は中流以上の人々であったからである。

鶴見祐輔は『後藤新平』第一巻の中で、「衛生ノ盛衰ハ国民ノ命価ニ関ス」と題する講演に触れつつ、「伯が衛生の宣伝につき、いかなる論法を用いたかを知るよすがとして」(三三九ページ)、この論文の概要を記している。

(3) 『国家衛生原理』においては「健康ノ価」と表現される。

「命価説」は、その後に書かれた『国家衛生原理』においては、より正確に、生産力の担い手、富の源泉としての労働者・貧民の「健康ノ価」へと等価・吸収されている。「抑々健康ノ価即生命ノ価値」(一五四ページ)と表現されている。

参考文献

日野秀逸、「医療政策思想史ノート」第八回、第九回、第一回、第二〇回、『月刊保団連』第一九七号(一九八四年四月)、第二〇〇号(一九八四年五月)、第二〇三号(一九八四年八月)、第二四八号(一九八六年一〇月)。

(国立公衆衛生院)

医科・歯科器械カタログの変遷

谷津 三雄

今日、医学・歯学に関する機器のカタログは一般に医科器械カタログ、歯科器械カタログという名称で呼ばれているが、江戸時代の一枚刷によると「外科道具品々」「阿蘭陀外科道具品々」「正札無引、長崎広瀬外科道具品々」「諸流外療道具品々」などがあり、主として外科(療)道具でその中に眼科(家)道具や産婦道具が含まれている。

日本最初のカatalogといわれているものは明治11年9月6日版權免許、松本市市衛門刊の「医療器械図譜」であり、次いで明治14年8月出版の岩本五兵衛刊の「医家器械図譜」があり、これらは明治10年、同14年の第一回同二回の内国勸業博覧会で、それぞれ有功賞をうけたことが記されている。これらは、いずれも銅版、一六〇ページ内外、非売品ではなく70〜75銭で外国の器械書の訳本で外科の範囲だけでなく、急速な医学、歯学の進歩につれて解剖用機

具や診断や検査、また歯科用器具など多彩な品種が掲載されている。おそらくカタログにより医家が注文し外国に発注したのであろう。

しかし、演者が蔵するカタログの中に石代十兵衛編輯、遠州屋十兵衛蔵版、医術用図書があり、明治10年12月17日版権免許、同年12月25日出版で松本市左衛門のものより古く、本書が日本最初の医科器械カタログと思われる。なお、本書は明治13年1月20日に改題し医用器械図譜となり、さらに明治18年11月再版、増訂、医用器械図譜、明治27年4月1日改正（非売品）、医療器械正価表と変遷したようである。大阪の白井松よりのものは明治16年12月24日版権免許同年8月8日出版（初版）で医用器械図譜、増補訂正、医用器械図譜は明治22年12月刊（二版）、同名で明治29年8月刊（三版）が、また一九一二年刊（明治45）3月の四版はCATALOGUEである。ちなみにその他の架蔵本をみると、明治22年6月刊「学校用器械薬品目録」、明治26年頃刊「医療器械価表」、同27年2月、大磯重輔刊「医療器械実価表」、同27年、松本儀兵衛刊「医科器械実価表」、同30年頃刊「医療器械定価表」、同33年、鈴木浅之助刊「医

科器械定価表」、同33年の佐々木商店刊「医療器械実価表」、同40年の松本福松刊「医科器械目録」、同40年の野田商店刊「医療器械概目表」、同41年「風雲堂医科器械目録」（アートの紙で今日とほとんど変わらず、左横書きで写真が多く表題はCatalogue Surgical Instruments）、同43年、京都の堂阪器械店刊「医科器械目録」、同44年の石渡器械店は「医科器械目録」、同44年半田屋刊「医療器械代価表」（横書き）、大正元年の半田屋刊「医療器械代価表」（縦書き）などがある。

このように医術用図書、医家器械図譜、医療器械図譜、その他、目録、概目などの名称が、また価表、実価表、定価表、代価表などと記されている。そして、最初は外国のものにならないながらも、東大、順天堂、日赤などの指導によるのがみられ、次第に国産化されていったようである。半田屋は鍼に特徴がみられ、また、日清、日露戦争などの影響も多くみられる。後藤風雲堂は顕微鏡からレントゲンに移行するという特徴がみられ、これら器械店は医療器械店あるいは医術器械店と称し器械のほかは薬種問屋や本屋も兼ねていた。

なお、歯科におけるカタログの最初のものは明治28年8

月歯科学会月報第55号付録歯科治術学図譜であろう。

(日本大学松戸歯学部)

土肥慶蔵『日本皮膚病黴毒図譜』

刊行の意義

長門谷洋治

土肥慶蔵(一八六六—一九三〇)は明治三六(一九〇三)年に『日本皮膚病黴毒図譜』第一帙を朝香屋書店より上梓した。土肥が東京帝国大学の皮膚病学黴毒学講座の教授に就いたのは明治三一年であつたから、それから五年目の挙である。この図譜が上梓された最大の意義は、わが国の皮膚科学が翻訳的なものから脱皮して、わが国固有の皮膚科学を樹立したことを示した点にあらう。本図譜は日本と題していることに土肥の自負が感じられる。土肥は本図譜に、序文の類を記していないので、直接にその意図を知ることができないが、この類推に大きな誤はないだらう。今すこし上梓までの経過をみてみよう。

土肥は明治二三年に東大を卒業、外科に入る。翌二四年に皮膚病学黴毒学担任の初代教授に村田謙太郎が就くが翌